

たいせつな音

大内裕子さん(東京都府中市)

最寄り駅から私の家までは歩くと三十分かかるが、私は運動のためにしばしば歩いて帰っている。

あれは、金曜日、会社の同僚と飲んで帰った深夜のことだった。静まり返った夜道。

いつものように家に向かって歩いてしていると、

「ことん……ことん……」

どこからともなく、その音が聴こえてきた。

「……ことん……ことん……」

優しい音があたりの静寂に響き渡る。綺麗な音。心地良い音。なんだろう。不思議に思い、音の主がわかるまでその場に立ち止まる。

誰かがそんな私の様子を見かけたらきつと訝しがるだろう、でも今ここには誰もいない。私はあたりを見回した。

すると、足下にまるい白い花がたくさん落ちていっているのに気がついた。

私はしゃがみ込んで音に集中した。すると、まさに次から次へと白い花が夜空から落下し、地面に触れる瞬間を見ることができた。

美しいその音は、花の落ちる音だった。

後で調べてわかったことだが、絶え間なく、花を落とし続けるその木は、柿の木だった。

柿の木は、白い花(雌花と雄花の二種類)を咲かせた後、雌花だけ残して雄花は地面に落とすそうので、残された花だけが、あの橙色の実に成長するそうだ。

「我慢での節電」ではなく、「幸せな節電」。
そして「幸せにつながる節電」へ。

第一回「節電と幸せ」 アイデア&エッセイコンテストの 大賞が決定!

「幸せな節電」「幸せにつながる節電」

「節電を通して気づいた幸福」をテーマにしたエッセイと
アイデアを募った本コンテスト。

エッセイ部門18作品、アイデア部門29作品が集まりました。
そしてこの度、環境の分野で活躍する人々を審査員に招き、
2時間におよぶ白熱の審査会を実施。
受賞作品が決定しました。

photographs by SOTOKOTO



Lohas Club

柿の木は「たくさん」実にすることより、一つ一つをもっと「たいせつ」にするために、まるで涙を流すように、花を落としているように思えた。

私はその神秘的な音と光景と、柿の木の沈黙のメッセージの中にいつまでもたたずんでいた。

音楽を聴きながら歩いていなくて良かったと心から私は思った。

これまで、私は歩くときには必ずプレイヤーで音楽を聴いていた。

震災後、充電切れとなって以来、節電のため充電せずに放置していたのだ。

もしも音楽を聴いていたら、その密やかな音に気づくことはなかっただろう。

そう考えると、私はもしかしたら、これまで数多くの二度とない奇跡的な瞬間に気づくことなく通り過ぎて来たのかもしれない。

静けさがこの瞬間に私を導いてくれたのだ。

それ以来、私は、自分にとって、本当に必要なものと、そうでないものを意識して見直すようになった。

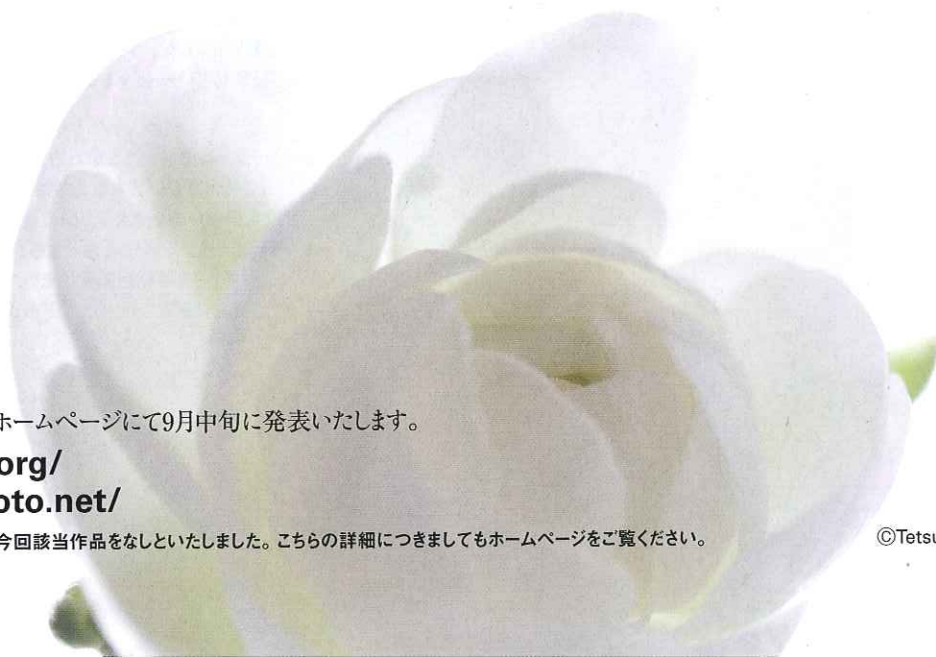
例えば、なんとなく毎日歩きながら聴いていた音楽。イヤホンを外して周囲の音に耳を澄ませてみよう。

会社のデスクでお昼を食べながらなんとなく検索するインターネットもやめて、外に出て緑を見ながらお弁当を食べてみよう。

私は、節電を通じて自分にとって余計なものを排除して、その分「今」という瞬間をもっと大切にしたいと思ったのだ。

これは柿の木から教えてもらったことだ。

柿の木が落とした白い花があんまり綺麗なので、その晩、思わず拾って帰ったけど、次の日の朝になったら、もう茶色に変色していた。



そのほかの受賞作品の詳細はホームページにて9月中旬に発表いたします。

<http://www.ishes.org/>
<http://www.sotokoto.net/>

※アイデア部門の大賞については、今回該当作品をなしといたしました。こちらの詳細につきましてもホームページをご覧ください。

©Tetsuya Tanooka/orion/amanaimages

枝廣 淳子
 幸せ経済社会研究所所長／環境ジャーナリスト



「我慢」「面倒」などの形容詞がつきがちな「節電」に、「幸せ」をくっつけたら何が見える？ というお題に、どのくらいの応募があるか心配でしたが、個人の体験や気づきの向こうに見える「幸せ」がいろいろなモチーフや筆致のエッセイになって届き、うれしく思いました。自分の気づきから、共有や社会を変えていく動きへとつながっていくことを願っています。アイデア部門は出しにくかったかな？ 今後に期待！ です。

塩見 直紀
 半農半X研究所代表



意外と斬新なことが生まれにくいテーマで、また他者との差別化も難しいテーマだと思います。そんな中で目をひく何か、がある作品がありました。エッセイの場合は文の完成度ももちろん大事ですが、「普遍的な何か」にタッチしていることが重要だったのかもしれない。審査をしながら、考えました。自分なら何をテーマに、どんな切り口で書いたらだろうと。締め切りまでに書きあげ、応募されたみなさまに敬意を表します。

田鎖 郁男
 エヌ・シー・エヌ代表取締役社長



電気より元気。「計画停電と節電」による不便さを、新たな発想と気づきに変えていくみなさんのパワーを感じました。効果的なアイデアは少なかったものの、「節約、節度に対する高い倫理観」「家族への愛情」「シンプルに生きることへの美意識」、日本人の持つ高い感性が感じられて、幸せな気分になりました。自然と共生して生きること、エネルギーを大切に使うことへの気づきを広め、日本を明るい楽しい社会にしていきたいと思います。

丹羽 順子
 古着交換会xChange主宰／サステナビリティ活動家



幸せなアイデアばかりで読んでいて、とても勇気づけられ、励まされました。みなさんが書いてくださったように、心を込めて一つひとついねいに、ものを大切に生きていくことが、原発のない明るい未来につながるかと確信しました。節電って、苦しいものではなくて、ほがらかな楽しさがたくさん詰まっているもの。このコンテストをきっかけに、そういうライフスタイルがもっと広まり、もっと深まればいいなと感じずにはいられません。

牧野 廉
 国際基督教大学4年、イーズインターン



多くの作品において、我慢して行うネガティブな節電ではなく、電気を使わないことで「大切なもの」が感じられる節電のあり方が描かれており、素晴らしかったです。ぜひ実践してみたい！ と思うような優れたものから、優しさが伝わってくる感動の幸せ節電まで、応募作品を通じてたくさんの気づきがありました。これからの未来の社会の在り方のヒントにもなっていたような気がします。審査員を務めさせていただき、感謝です。

町井 則雄
 NPO CANPANセンター



「節約」という言葉を辞書で引くと「ムダ遣いをやめて切りつめること」だそうです。ムダ遣いと切りつめることの間には無限の階段があります。今、私たちはムダを許容できる世界に生きておらず、必要な電気は使い続けなければ生きていけません。とすれば、この無限の階段に存在する生き方や手法などをみなで出し合い、可視化することで自分たちが何をすべきかが見えてきます。本コンテストには、そんな知恵が集まり、とても興味深く審査に関わることができました。

山本 亘
 清水建設 総合企画部



エッセイ部門は、多くの力作からの選定に当たり、①論旨の明快さ、②文章力、③内容の魅力度の3点で評点しました。選定作品はいずれの項目もバランスよく高いレベルとなっています。アイデア部門では、日常のちょっとした取り組みの中から、家族のつながりや生活の彩りのようなものが生じたという応募に心を惹かれました。今回受賞された方々は、あれもこれもではなく、一つのことを突き詰めていらっしゃるみなさんだと思います。

酒井 卓爾
 月刊ソトコト編集部



本コンテストに応募いただいた方たちのほとんどが、節電を通してテレビや電化製品との付き合い方を考えた結果、それぞれの幸せを見つけ出していました。電気の使い方を考えることは、豊かな時間を取り戻し、幸せな暮らし方につながっている。こういった幸せな暮らしを広めるとともに、小さな幸せを見つけた！ という小さな喜びが節電のモチベーションになっていることを、節電に向きでない人にも伝えていきたいと感じました。

第二回「節電と幸せ」アイデア&エッセイコンテスト開催予定!

詳細はホームページにてお知らせいたします。